

# J.クリュス『ティム・ターラー』における 現実と幻想的場面の効果

漆 谷 球美子

## はじめに

第二次世界大戦後に活躍した作家ジェームス・クリュス (James Krüss, 1926-1997)<sup>1</sup> は、1962年、彼の4番目の児童文学作品である『ティム・ターラーあるいは売られた笑顔』(*Timm Thaler oder Das verkaufte Lachen*) を出版した。主人公の少年ティム・ターラーは悪魔リュフェットと、自分の魅力的な「笑顔」と「賭けに勝つ力」の取引をする。ティムは「賭けに勝つ力」を利用し裕福な暮らしを手に入れることに成功するが、やがて失った笑顔の重要性に気づき、それを取り戻すために奮闘する。

本作品では、世界各地の都市が物語の舞台となり、その背景に資本主義社会における経済活動が描かれ、当時の社会体制や人々の様子が作品に反映されている。また本作品は、「悪魔との契約」という幻想的なモチーフを採用することで、子供を引き付ける冒険物語に仕上がっている。本稿では、『ティム・ターラー』に描かれる現実的描写と幻想的場面に注目し、その両者を考察することで、それらがこの作品に与えるリアリティと幻想的效果を明らかにする。

## 第1章 『ティム・ターラー』の構成

クリュスは、最初の児童文学作品である『ロブスター岩礁の灯台』(*Der*

*Leuchtturm auf den Hummerklippen*, 1956)<sup>2</sup> や、ドイツ児童文学賞を受賞した『ひいおじいさんとぼく』(*Mein Urgroßvater und ich*, 1959) などの作品が認められたことにより、児童文学作家としての地位を確立した。これらの作品は短編小説であり、クリュスは彼の故郷ヘルゴラント島を思わせる島や海辺を舞台に登場人物たちが沢山の物語を語り合う日常を描いている。

しかし1962年に出版された本作品は、それまでの作品とは違い、現代社会を舞台に繰り広げられる悪魔との契約の物語であった。クリュスの友人であるクラウス・ドーデラーは著書の中で、「1960年前後はクリュスにとって3つの大きな文学プロジェクト<sup>3</sup> を成功させた年であった」と述べており<sup>4</sup>、その中の一つに、初めての長編小説である『ティム・ターラー』<sup>5</sup> の執筆を挙げている。<sup>6</sup> クリュスは本作品において今までとは異なる作風や形式に挑戦しており、1959年頃から3年以上の長い創作期間を必要とした。出版時の *Die Zeit* 紙の書評は、長い頁数や子供たちには理解し難い経済活動の描写、対象年齢との不適合などを批判したが<sup>7</sup>、本作品は読者の人気を獲得することに成功し、今日に至るまで定期的に版を重ね、さらに映像化やアニメ化<sup>8</sup> もおこなわれた。

1978年、クリュスは「101日物語シリーズ」(*der Zyklus „Die Geschichten der 101 Tage“*) の構想に従い、それまで出版していた11作品に加筆をおこない、さらに6作品を新たに執筆した。合計17作品からなるこのシリーズは、「ボーイ」(Boy)<sup>9</sup> と呼ばれる人物を軸に各作品がつながっている。本作品はこのシリーズに含まれていたため、初版では「笑いを失くした少年」の物語として独立していた『ティム・ターラー』に新たに枠外物語が追加された。クリュスは枠外物語として「プロローグ」(*Vorspiel*)、ティムがボーイに物語を語る7日間(各章)の始まりと終わり、そして「エピローグ」(*Nachspiel*) を書いた。彼はそれらの加筆箇所、ティムの友人としてボーイを登場させ、ティムの語る物語を小説

J.クリュス『ティム・ターラー』における現実と幻想的場面の効果

にまとめる作家としての役割を与えている。

初版（James Krüss : *Timm Thaler oder Das verkaufte Lachen*. Hamburg : Verlag Friedrich Oetinger 1962.）では、現在プロローグが書かれている物語の冒頭に「読者に向けて」（“An den Leser”）が書かれている。以下はその要約である。

この物語は私（＝クリュス）に50歳ほどの男が話した物語である。彼はライブツィヒに人形劇の本の印刷を確認するために訪れていた。最も注目すべき点は50歳という年齢にもかかわらず、まるで10歳の少年のようにかわいらしく元気よく笑うことであった。この男は誰なのか、私はただ推測することしかできない。この物語の語り手が誰で、そしていつ起こったことなのかは明らかにしていない。（少なくともこの物語の主要部分は1930年頃に演じられたと推測される。）私はこの物語を仕事の休憩時に大きな印刷全紙（Bogen）の後ろに書いたため、この本はその印刷全紙によって区切られている。<sup>10</sup>

この印刷全紙による区切りは全部で33枚分となる。クリュスは印刷全紙によって章（Kapitel）を構成し、さらにそれらをまとめて4つの巻（Buch）を編成している。それらは、「第1巻 失われた笑い」（ERSTES BUCH・Das verlorene Lachen）、「第2巻 混乱」（ZWEITES BUCH・Verwirrungen）、「第3巻 迷路」（DRITTES BUCH・Irrwege）、「第4巻 取り戻された笑い」（VIERTES BUCH・Das wiedergefundene Lachen）という表題をつけられており、各巻の冒頭にはそれぞれの巻に出てくるセリフが1つ載せられている。章の振り分けは、第1巻には第1章～第10章、第2巻には第11章～第20章、第3巻には第21章～第26章、第4巻には第27章～第33章となっており、章ごとに題名が付けられている。

1978年以降の版は、初版の4巻の編成ではなく、ティムがボーイに語っ

た7日間という編成で区切られている。各日ごとの題名はないが、その日にティムがボーイに語った内容を短く紹介している。この7日間はさらに細かく印刷全紙による章を形成している。この章の区切りは初版から引き継いでおり、全33枚分の題名も同じである。7日間の振り分けは新しく以下のようになっている。1日目には第1章～第5章、2日目には第6章～第10章、3日目には第11章～第15章、4日目には第16章～第20章、5日目には第21章～第26章、6日目には第27章～第30章、7日目には第31章～第33章となっている。以上のように『ティム・ターラー』は1978年を境に大幅に構成を変更しているが、枠外物語に変更を加えているのみであり、「笑いを失くした少年」の物語は継続して使われている。<sup>11</sup> 枠外物語においても、語り手の男が大人になったティムであると設定し、聞き手である私をボーイに置き換えている。

## 第2章 作品に描かれたリアリティ

本作品では、実際に存在する地名が多く登場する。ドイツ北部に位置するハンブルク周辺の地名が頻繁に使われているし、クリュスの故郷であるヘルゴラント島も会話に登場する。その他にも戦後ドイツの様子や、本作品が執筆された1960年代前半の西ドイツの社会体制なども描かれている。前述したようにクリュスは後から枠外物語を追記しているため、「笑いを失くした少年」の物語と加筆した部分は、それぞれ異なる視点で現代社会を描いている。本章ではこれらの違いを考察しながら、クリュスが物語の中に描いた現代社会を指摘していく。

### 第1節 枠外物語に描かれた戦後ドイツ

枠外物語の舞台となるのは、ライプツィヒ（Leipzig）である。ここにボーイは絵本の校正のために、ティムは人形芝居についての本の校正のために訪れていた。彼らは印刷工場で見会し、ティムはボーイに頼まれ

## J.クリュス『ティム・ターラー』における現実と幻想的場面の効果

て、物語を語ることとなる。その他にもドイツの地名としてボーイの出身地ヘルゴラント島 (Helgoland) や、ハンブルクの町にあるオーヴェルゲンネ (Övelgönne) とフィンケンベルダー (Finkenwerder) という名前が登場している。しかしながらこれらの町に関する詳しい描写はなく、あくまでも地名だけが会話の中に登場している。

枠外物語における現代社会の描写は、主に前書きに記載されている。次の場面は物語の冒頭に描かれたボーイが乗り合わせた電車での様子である。

それはマグデブルクからライプツィヒに向かう、ゆっくりと進む、汚れた満員電車の中でのことだった。第二次世界大戦終了後の当時は、そのような電車が汚い黒い煙を吐き出しながらドイツの至る所を動いていた。(…) 電車はとても混んでいて、外の車両をつなぐデッキにも人がひしめき合っていた。しかし私は思いがけず、私のほかに紳士が一人だけ座っているコンパートメントに足を踏み入れた。彼は当時にしては珍しいサングラスをかけていた。(…) これらすべてのことが当時のドイツでは珍しかった。ほとんど空のコンパートメントもサングラスも、質の良いスーツも、汚い満員電車の中で正式な昼食の招待を受けることも。(…) 突然、当時は上品な乗り物であった赤と黄色のディーゼル運転の電車が、私たちを追い抜いた。(Timm S.12f.)

人々が移動手段として利用する、黒い煙を吹き出す蒸気機関車や、その横を通過するディーゼル運転の電車も、当時のドイツ社会を思い起こさせる描写である。事実、1954年には1800キロしか整備されていなかった連邦鉄道であるが、1966年には6994キロまで増加しており、さらに電車が蒸気から電化、ディーゼル化している只中であつた。<sup>12</sup> 1960年には運転

している電車のうち蒸気機関車が55.8%であったのに対し、電化22.3%、ディーゼル化 21.9%と徐々に動力近代化へと進んでいた。<sup>13</sup> 敗戦後のドイツは貧しいながらも着実に復興へと歩んでおり、その様子をクリュスは作中に描いているのである。

その他にも、クリュス自身の体験をもとに描かれているのが、ボーイが述べるヘルゴラント島での出来事である。

私は友人のティムに、私たちが住んでいた小さな島から大きな大陸へ引っ越しをしなければならなかったこと、というのは、ティムも知っていたが、爆弾が島に建てられていた家をことごとく破壊したためであったことを物語った。(Timm S.15)

ヘルゴラント島は第二次世界大戦中にドイツの重要な海軍基地が作られたため、爆撃の標的となり、住民たちは島からの避難を余儀なくされた。<sup>14</sup> 戦時中に落とされた爆撃の爪痕は今でも生々しく残っている。<sup>15</sup> クリュスは実際に自身が体験した故郷からの避難の事実を作品に描いている。

このようにクリュスは、枠外物語ではその舞台が第二次世界大戦後のドイツであることを明確に表示している。対して「笑いを失くした少年」の物語内では、都市の細かい描写や社会体制への言及はあるが、いつの時代に起こった物語であるかを明らかにしてはいない。この理由として、前述した「101日物語シリーズ」の影響だということが出来る。初版時はティムが主人公の物語であった本作品は、シリーズに組み入れられたことにより、その主人公であるボーイを登場させなければならなくなった。それは、このシリーズがボーイの成長物語であり、彼の旅を描いているためである。そのことを踏まえたうえでクリュスは、シリーズの一貫性を保つため、枠外物語の部分にボーイがいつ、どこで『ティム・ターラー』の物語を聞いたのか明確に示す必要があった。加えてクリュスは読者にシリーズ

## J.クリュス『ティム・ターラー』における現実と幻想的場面の効果

であることを意識させるために、すでに出てきた地名や出来事を本文に記している。例えば、ヘルゴラント島でのティムとの出会いは『ユーリエおばさんの家』という作品で描かれていることであるし<sup>16</sup>、オーヴェルゲンネという地名は『ロブスター岩礁の灯台』でボーイが訪れた町の名前である。<sup>17</sup> このように枠外物語において、クリュスはその時代や場所を明らかにしている。

### 第2節 「笑いを失くした少年」の物語に描かれた現実社会

#### 1. 世界各地の描写

本編である「笑いを失くした少年」の物語内では、各都市の描写が細かく行われている。登場する都市もドイツ国内にとどまらず世界各地に跨っており、例えば「6日目 27.旅の一年」(Timm S.192-199)では、ティムとリュフェットが世界を旅する様子が描かれている。

本作品では北ドイツの大都市ハンブルクが最も重要な舞台となる。

広い道のある大都市の町中の裏側に小さな路地がある。その道は窓を通して両側から手が届くほど狭い。沢山のお金と情感を持った他所から来た訪問者は、偶然にもその裏道に入った時、彼らは、なんて絵のような美しさなんだ！と大声で叫び、婦人たちはなんて牧歌的でロマンティックなんでしょう！とため息をつく。(…)父と息子は公園の傍にある出窓のある明るい住まいから石畳舗装の裏通りに引越してきた。そこは絶えず胡椒やキャラウェイ、アニスといった香辛料の匂いが漂っていた。なぜならその裏通りにはこの街の唯一の香辛料工場があったからだ。(Timm S.20)

冒頭でこのように表現されたハンブルクは、ティムが生まれ育った町であり、リュフェットと契約を結んだ町であり、ティムが笑顔を取り戻すこ

とが出来た町である。ティムはここで幼少期の貧しい暮らしと、賭けの力によって手に入れた豊かな暮らしの両方を体験した。このような生活の質の変化を、クリュスは住居の居場所を変え、町の表通りと裏通りという形で表している。その他にも船着き場の様子が描かれており、作中に出てくる船会社 HHD（ハンブルク・ヘルゴラント汽船）は、実際にハンブルクからヘルゴラント島を往復している船がモデルとなっていると推察できる。<sup>18</sup>

リュフェットと再会したティムは世界各地を旅することとなる。アテネでは町の中心にある市場や地元の人々が利用するレストランを訪れる様子が書かれているし、イタリアのジェノヴァでは大通りの裏側にある入り組んだ街並みが描写されている。

リュフェットはティムを連れてアクロポリスに登り、神殿の柱の間からエーゲ海の青い色を見ることはなかった。(…)彼はティムをアテネの市場に連れて行った。(…)歩道は全て大声を上げる売り子と商談する客で押し合い圧し合いの状況であった。(Timm S.141f.)  
幸運なことに彼はジェノヴァの複雑な裏通りに入り込んでいた。そこにあるたいていの家は表と裏に出入り口があった。(…)少年は、おしゃべりをしながら値引きをしている主婦たちの間に小さな市場を見つけ、酸っぱい匂いが充満する小料理店をもう一度通り抜け、すぐに目の前に停留しているバスの開いたアコーディオンドアに乗り込んだ。(Timm S.133)

クリュスはアテネの描写において活気ある市場の様子を、販売している魚や肉、チーズなどの商品を色彩やにおいを用いて表現し、行きかう人びとの大群を描いている。ジェノヴァでは、追手に追われているティムが逃げ込んだ住宅地に住む人々の生活を、においや音を通して描いている。そ



## J.クリュス『ティム・ターラー』における現実と幻想的場面の効果

他にもティムが訪れるメソポタミアの豪華絢爛な城の様子、その道中に飛行機から見える風景や山奥に住む人々の様子なども描かれている。このようにクリュスは『ティム・ターラー』において様々な都市の様子を描いている。

### 2. 資本主義社会の描写

本作品において大きなテーマのひとつとなっているのが、資本主義社会の在り方についてである。本作品に描かれている経済活動は主にリュフエット社という会社が舞台となっている。この会社は汽船会社や旅行会社、不動産業、国際貿易などといった様々な事業を展開し、世界を股にかける大企業である。これら全ての会社を束ねているのがリュフエットであり、クリュスは彼に世界経済の一端を荷う大企業の経営者としての役割を与えているのである。リュフエットは、自身の後継者となったティムに経済活動の現場を見せ、その仕組みを教える。そのため物語後半は、資本経済の仕組みや株、市場の説明に当てられており、これらの描写や登場人物たちによる解説は非常に具体的で、実際の社会状況を反映している。

悪魔が会社の中心に君臨しているため、リュフエット社のおこなう会社運営は何よりも利益を追求することにあり、それが会社の基本的な考えとなっている。このようなリュフエットの経営理念は、ティムが参加した役員会議の場にも表れている。この会議では、アフガニスタンにおける鉄研ぎ職人についての議題が持ち上がっていた。そこでティムは、弱小国に援助という形で市場に乗り出し、大きな利益を得ているリュフエット社の内情を知ることになる。リュフエットはアフガニスタンにおいて、はじめは善意の贈り物として貧しい人びとに自社製品を支援するも、それらを使い続けるためにかかる費用はリュフエット社の利益に還元されるという循環を作り出していた。つまり善意の形に見せかけた新たな市場の獲得である。現地の人びとはリュフエットの思惑に気づくこともなく、寧ろ贈り物

に感謝しながら、彼の作り出した経済の循環に組み入れられるのである。ティムは自身の利益を追求するだけのリュフェットの経営を「汚れた王国」(Timm S. 163) と表現し、批判している。もちろんリュフェット社はあくまで資本主義社会の会社の一例である。生活の向上を目指し働くことは重要であるが、自身のことだけを考え利益を追い求める姿勢に対し、クリュスは疑問を投げかけている。

クリュスはこれらの会社運営に対する批判だけでなく、日常的に使われている経済用語のわかりやすい説明もおこなっている。次の場面では、リュフェット社の役員であるヴァン・デア・トーレン氏がティムに株取引について解説をおこなっている。

「想像してみてください、ターラーさん、果樹園を作るとします。」  
(ティムはうなずいた。)  
「ですが果樹園を作ろうとしている人は、すべての苗を買うための十分なお金を持っていなかったため、彼自身では果樹園の一部にしか苗を植えられませんでした。残りの土地の苗は他の人々が買ってきて、植えました。木々が育ち、実がつくようになると、木を植えた人々はそれぞれ自身が植えた土地に相当する数の果物を受け取ります。もちろん毎年です。」(Timm S.157)

クリュスは読者である子供たちには難しいであろう言葉の解説を丁寧におこなっているのである。その他にも、商品の宣伝方法や会社間の駆け引きなど、現実社会でおこなわれている経済活動が描かれている。クリュスは、当時の西ドイツにおける資本主義社会を反映させながら、そこから生まれる社会的問題を指摘している。読者はクリュスによって描き出された現実社会を確認することで、その実態と問題点を確認することが出来るのである。

### 第3章 「悪魔との契約」のモチーフが生み出す幻想的な場面

本作品においてファンタスティッシュな効果を与えている大きな要因は、「悪魔との契約」のモチーフを採用したことにある。このモチーフは古くから存在しており、伝承文学から文学作品に至るまで様々な物語が創造されてきた。時代や社会に合わせた作品が生まれる中、20世紀後半になってクリュスは当時の社会に即した「悪魔との契約」の物語として『ティム・ターラー』を執筆したのである。

リュフェットは話し始めた。「ティム、私は君が望むだけの金を与えよう。私は君にテーブルの上で現金を渡すことはできない。しかし私は君にすべての賭けに勝つ力を授けよう。すべての賭けにだ、わかるか?」(…) ティムは興奮して尋ねた。「あなたは何が欲しいのですか?」(…)「私が代わりに欲しいものは、君の笑顔だ。」(*Timm* S.40)

ティムはリュフェットと自身の「笑顔」と「賭けに勝つ力」の取引をおこなった。本章では、この取引と彼らの存在が本作品に与えた、幻想的な効果を考察していく。

#### 第1節 悪魔の存在

本作品において悪魔リュフェットが果たす役割は非常に大きい。前述したように、彼は資本主義社会における経済活動を体現する存在であるが、同時に、本作品において幻想的な状況を作り出す役割も担っている。

リュフェットは「真一文字のような口に細長いかぎ鼻、その下には薄い黒い口髭」をたくわえ、「鋭い青い目の上には丸い帽子を目深にかぶり(…) 帽子も背広と同じチェック柄」(*Timm* S. 27) のスーツを着た上品な身なりの男爵として登場する。このようなリュフェットの紳士的な装い

は、ティムに不信感を抱かせることなく近づくために実に効果的な格好であると言える。しかし人間らしい姿とは異なり、彼が悪魔であることは名前に示されている。リュフェット (lefuet) という名は悪魔 (teufel) を裏返した文字の並びであるし、彼は「リュフェット」という名前の他にも「アスタロート」(Astaroth) (Timm S.140) という悪魔の名前を所有している。『地獄の辞典』によると、アスタロートとは「地獄に権力を誇る大侯爵で、最高実力者の一人」<sup>19</sup> である。<sup>20</sup> 例えばリュフェットは、笑いを取り戻そうと考えたティムに対し、悪魔の力を活用してティムを怖がらせ、彼の行為を妨害しようと試みる。

ティムは叫び声をあげながら飛び起きた。彼は雷を介して自分自身の笑い声が聞こえたような気がした。彼は大きく目を開き、丸窓の方へ視線を向けた。窓を通して二つの水色の目がキャビンの中を、少年の顔の真ん中をじっと見つめている。恐れと驚きでティムは再び目を閉じた。(Timm S.96)

ティムはいるはずのないリュフェットに、荒れ狂う海の中から冷酷な青い目で睨まれているような感覚に陥る。リュフェットは、ティムに恐怖を与えることで笑顔を取り戻そうという決意を取り除こうとしたのであった。彼はその他の場面でも、ティムに対し妨害を施しており、例えばティムと再会した場面では彼に呪いをかけようと呪文を唱えている。リュフェットの持つ力は強大であり、悪魔として主人公を脅かす存在である。

本作品ではリュフェットのほかにもう一人、人間の装いをした悪魔が登場している。リュフェットの部下であるグランディッツィである。彼はベヘモートという悪魔の名前を所持している。ベヘモートとは「威張っているが鈍重かつ愚味な魔人であり、がっしりと逞しく、美食や大食を専門分野とする。デーモンとしての地位を固めており、人間に暴飲暴食をさそ

## J.クリュス『ティム・ターラー』における現実と幻想的場面の効果

う」<sup>21</sup> という特徴がある。これは杵物語でボーイに豪華な昼食をふるまった、がっしりした体格のベヘモートの人物像と一致する。彼は杵外物語において、ボーイに取引を持ち掛ける。それは後にティムの物語をまとめて本として出版しようとするボーイを阻止するための行動であった。

「最近聞いたばかりですが、書くつもりだった本を書かないで、まさにそのことで、生計を立てている人がいるそうですね。」(…)「海辺の別荘とヨット、それに加えて決して空になることのない預金通帳。黙っていることが出来れば、これらすべてが手に入るのだ。」

(プロローグ)

彼はボーイの心に浮かんだ望みを言い当て、それを提供しようと申し出るのである。その申し出をする時点では、ボーイはまだティムとの再会を果たしておらず、グランディッツィは未来に起こることを予測して、先手を打ったのであった。しかしボーイは「書くことの方が大事」という理由から断っている。ボーイは悪魔の誘惑に負けることなく、富よりも自身の仕事を選択したと言える。<sup>22</sup> その他にも、グランディッツィは取引を申し出る前に、満員電車の中でボーイに豪華な食事を振舞っており、その配膳も非常にユニークな方法であった。

このような悪魔らしいおこないは、作品の中で幻想的な場面を作り出す手段となっている。様々な現象を引き起こすことのできる悪魔であるが、注目すべき点として、リュフェットがこの悪魔的な能力を会社運営やその儲けのために利用することはないということが挙げられる。経済活動の描写の中に、悪魔による幻想的な場面が組み込まれることはないのである。

### 第2節 賭けに勝つ力

本作品において、悪魔のほかにファンタジーを生み出す人物がティムで

ある。彼は契約によって手に入れた「賭けに勝つ力」を用いて、実現不可能な現象をおこす。リュフェットはこの能力を授けるとき、ティムに対して「この力が君の財産の基礎になるのだろう。」(Timm S.44)と述べている。リュフェットの言葉通り、ティムは賭けに勝つ力を活用し、競馬で沢山の金を稼ぐことが可能となる。

ティムはちょうど13歳の誕生日に、管理団体の好意により引退前に一度走らせてもらえることになったある馬に、沢山の金を賭けた。この馬には誰も賭けなかった、ティム以外には。そしてティムが賭けたと言う理由で、専門家も驚くことにその馬が勝った。ティムは現金で3000マルクを受け取った。(Timm S.59)

貧しい生活をしていたティムは、競馬で大金を手に入れることに、はじめは大きな喜びと強い満足感を感じるも、やがて金の所有によって傲慢になる継母や、そのことで近所の人々との信頼関係を失っていくことを目の当たりにし、力の使用に疑問を抱く。ティムは自身の笑いを取り戻し、元通りの生活に戻るための手段として「賭けに勝つ力」を活用することを思いつく。彼は、勝つことのできない賭けをおこなうことで、リュフェットとの契約を破棄させようと考えたのである。しかしながら「賭けに勝つ力」の効力は絶大であり、リュフェットはティムの考え出した「絶対に勝つことのできない賭け」をも次々と成功させていく。

「僕はジェノヴァに空を飛ぶ電車があることを知っているのです。僕はあなたとそのことでラム酒1本を賭けたいのですが。」(…)突然ジョニーは驚いたような声を上げた。(…)ティムは首を回して街の山の手の方向を見上げた。そこには家々の真ん中に通っている道路を、市街電車が空に浮かんでいた。それはちゃんとした電車だっ

J.クリュス『ティム・ターラー』における現実と幻想的場面の効果

た。それははっきりと見分けることが出来た。(Timm S.99ff.)

この引用は、実現不可能な賭けを考えていたティムが、友人ジョニーとおこなった賭けである。ティムは後に友人となるリッケルト、クレシミール、ジョニーと賭けをおこなっており、彼らはありえない状況を作り出すティムの賭けの正確さと彼が笑わないことへの不信感から、協力を申し出るのである。ティムは賭けの力を利用して、リュフェットに近づくことに成功する。しかし物語の後半になるに連れて、ティムは「賭けに勝つ力」を使用する機会が少なくなる。リュフェットの後見人という立場を手に入れたティムは、金の受け渡しによって笑顔を取り戻すという計画を進めていく。

本作品において、ティムの他にも「賭け」をおこなう場面が存在する。それは、ティムがリッケルト婦人と共に観劇した『金のガチョウ』の芝居内である。グリム童話に収集されているこの物語は、笑うことのできない王女の話である。王女を妻にするため城へ向かう他国の王様と貧しい浮浪者が、王女を笑わせることが出来るか賭けをする場面がある。

王様「私は城で笑うことのできない姫の話を目にした。私も真面目な男ゆえ笑いを軽蔑している。そのため私は彼女を妻に迎えたい。(…)」

浮浪者「私はあなたに希望を抱かぬようご忠告いたします。なぜなら私が来たら、彼女は笑うからです。」(…)

王様「一緒に姫のもとへ行こう。そこへ行き、姫が笑い、同意したのであれば、私の王位は君に代わるだろう。」

浮浪者「賭けは成立しました、陛下。しかし私は次のように思います。笑いは人間と動物を区別するものです。そして正しい時に笑うことができることで人間であることがわかるのです。」

(Timm S.77ff.)

結果、浮浪者は姫を見事に笑わせ、賭けに勝利する。ガチョウを先頭に離れることのできない行列は、姫と観客を笑いに誘う。童話の中で、笑いを巡って行われた賭けは笑顔を浮かべさせることが出来るか否かであった。笑うことを否定する王に対し、浮浪者は笑顔が人間と動物を分ける人間としての象徴であると主張する。この童話を用いて示しているように、ティムもまた「賭けに勝つ力」を使い、笑顔を取り戻すことに成功するのである。

#### 第4章 現実と幻想の融合

クリュス作品ではその多くが実際に存在する都市を舞台に、幻想的な設定が組み込まれている。その例としてカモメやネズミなどの動物が人間と会話をすることや、ポルターガイストなどの生き物が違和感なく物語の中に紛れ込んでいることなどがあげられる。また、現存する都市を舞台とし、第二次世界大戦などの歴史的事実やクリュス自身の体験なども物語の中に書かれることが多い。<sup>23</sup> 上述のように『ティム・ターラー』も例外ではなく、リアリティのある舞台設定に加え、「悪魔との契約」という幻想的なモチーフの採用している。最終的にティムは「自分の笑顔を取り戻す」という賭けをおこなうことで、この契約を事実上無効にし、笑顔を取り戻す。つまりクリュスは、リュフェットが提供する取引対象を「賭けに勝つ力」にすることによって、ティムが「笑顔」を取り戻す仕掛けを用意している。このような作品の展開を見ると、クリュスが「賭けに勝つ力」を取引材料にした創作上の理由が分かる。この力は、作品の展開にみられるように悪魔と主人公の騙し合いを可能にしている要素である。ティムがどのような賭けを考えだし、その賭けにリュフェットがどのように勝つかが、ティムの冒険に面白味を増している。

悪魔によってあるいは賭けに勝つ力を利用したティムによって作り出された幻想的な場面であったが、クリュスはそれらの一部に現実的な設定を



## J.クリュス『ティム・ターラー』における現実と幻想的場面の効果

書き加えている。例えばティムとリュフェットが結ぶ契約である。ティムは従来の「悪魔との契約」同様、血の署名でもって契約を成立させる。リュフェットは契約書を用意しているわけだが、詳細な契約内容が記載されており、まるで現代社会におけるビジネスシーンを再現したかのような内容となっている。契約事項は全部で7項あり、笑顔の所有権に関する条項や、パターン別の対処法など事細かに記載されている。

1. この契約はリュフェットとティムの間で結ばれるものとし、
2. ティムが譲渡した笑顔はリュフェットの任意で使用できる。
3. ティムはいかなる賭けにも勝つことができる力を譲り受ける。
4. 両者はこの契約に関して他言してはいけない。
5. 沈黙を破った者は、譲り受けた能力を失う。
6. ティムが一度でも賭けに負けたら、リュフェットは笑顔を返還する。しかしその場合はティムも賭けの力を失う。
7. この契約はサインをした時から有効となる。(Timm S. 40-43)

このような細かい契約書を利用した取引は、現代的な契約社会のパロディと言えよう。実際、リュフェットにとって笑顔の獲得はビジネスを迅速に成功させるための手段の一つであり、売買可能な対象のひとつという認識しかない。本作品では人間らしさの象徴として描かれている「笑顔」を商品として扱うリュフェットの姿は、何事も儲けのために利用する資本主義社会における経済活動のネガティブな側面と言えるだろう。このように幻想的な場面である笑顔の取引さえも、クリュスは経済活動の一環として描くことで、リアリティを生み出しているのである。

悪魔が作り出す幻想的な場面のほとんどは、論理的に説明できる理由が存在している。次の場面はプロローグにおいて、グランディッツィがボーイを昼食に招き、満員電車の中でそれを運んでくる様子である。

それはいくらか変わった方法であったが、実際に昼食は運ばれてきた。突然、当時は上品な乗り物であった赤と黄色のディーゼル運転の電車が、私たちを追い抜いた。この電車は私たちの傍でちょうど同じ速さで、一定の距離を保って走っていた。食堂車の中を覗くことが出来たその広い窓は、私たちの電車の窓と同じ高さになっており、昼食に招待してくれた紳士はその窓を開けた。向かいの電車にいた男も同じように窓を開け、強風のため卵型で高く重い銀製の蓋で覆われている大きな盆を私たちに手渡した。紳士といっしょに私はそれを受け取った。(Timm S.13)

ボーイはこのようにして準備された昼食をご馳走になる。実際には実現困難な方法ではあるが、不可能ではないと思えるような手段を用いて描いている。その他の場面においても、例えば、ジェノヴァにて浮いている電車を見た場面では、ティムとジョニーが見たその正体は蜃気楼であったことがあとから判明するし、男爵の居場所を知るために賭けをおこなうとラジオでその旨が放送される。このようにクリュスは現実的な描写と幻想的な方法を上手く組み合わせ、物語の世界観を作り出している。

ティムとリュフェットの笑顔を巡る駆け引きは、ティムが資産家の後継者となった時点で、金と人間性を巡る駆け引きへと発展する。ティムは資産か笑顔かの選択を強いられ、笑顔を選択する。笑顔の喪失から始まったティムの冒険は、「悪魔との契約」を巡る幻想的な物語にとどまるのではなく、当時の資本主義社会における経済活動の仕組み、会社経営の実態、世界経済の関係性や株取引に関する知識なども含む現実社会を反映した冒険物語にも成り得ているのである。

クリュスはこのように現実と幻想を織り交ぜて描くことによって、ティムとリュフェットの駆け引きに魅力を与え、読者である子供達の興味をかき立てることに成功していると言えよう。

### 終わりに

ドーデラーはクリュスが現実社会の中で様々な幻想を描いていることについて、「クリュスは物語を書くことで、世界をより良い方へ改善し、ファンタジーのもつ力を強化することを目的としている」と述べている。<sup>24</sup> またクリュス自身も、著書の中でファンタジーについて次のように述べている。

ファンタジーは希望を打ち砕くこともできるし、希望を抱かせることもできる。ファンタジーは世界を水のように濁らせることもできるし、ことのほか透き通ったように明確にすることもできる。(…)それなしで私たちは生きていくことはできない。なぜならファンタジーは全ての芸術の、すべての学問の原動力だからだ。<sup>25</sup>

『ティム・ターラー』に限らず、クリュスは「美しい物語」を描くことに強いこだわりを見せており、そのためにファンタジーを用いることの重要性を作品の中で繰り返し述べている。クリュスは『ティム・ターラー』においても、現実と幻想を織り交ぜファンタジーを描いた。彼は本作品を、その背景に資本主義社会や国際化する経済活動がはらむ問題を取り上げながら、困難を乗り越えて成長する少年の冒険物語に仕上げたのである。

漆 谷 球美子

テキスト

James Krüss: *Timm Thaler oder Das verkaufte Lachen*. Hamburg: Verlag Friedrich Oetinger 2006.

本書からの引用は本文中に *Timm* と略記し、頁数を付すことにする。日本語訳については、森川弘子訳『笑顔を売った少年』(未知谷 2004年)を参照したが、本文中の訳は筆者がおこなった。なお固有名詞は、森川訳に倣った。

また本稿では、初版: James Krüss: *Timm Thaler oder Das verkaufte Lachen*. Hamburg: Verlag Friedrich Oetinger 1962. からの引用もおこなっている。初版からの引用に関しては、注に記載する。

注

- 1 James Krüss の名前は、ジェームス(植田敏郎訳)、ジェームズ(大塚雄三訳)、ジェイムス(森川弘子訳)、ジェイムズ(野村法訳)などと訳されているが、本稿では『児童文学者人名事典—外国人作家編—』(出版文化研究会、2000)に倣い「ジェームス・クリュス」と表記する。
- 2 この作品はクリュスにとっては初めての児童文学作品である。児童文学作家として有名なクリュスであるが、処女作は1946年に出版した『黄金の糸』*Der goldene Faden* である。
- 3 他の二つのプロジェクトは、1959年に出版した叙述名詩選 *So viele Tage wie das Jahr hat* への取り組みと、1963年に出版した『ワシとハト』*Adler und Taube* の執筆であった。
- 4 Klaus Doderer: *James Krüss Insulaner und Weltbürger*. Hamburg: CARLSEN Verlag GmbH, 2009, S.30.
- 5 当初は『笑いを売ったガイの物語』*Geschichte von Gay, der sein Lachen verkaufte* という題名だった。Vgl. : Klaus Doderer: *James Krüss Insulaner und Weltbürger*, S. 332.
- 6 Ebenda.
- 7 Vgl. : Die Zeit 47/1962 „Das verkaufte Talent“ <http://www.zeit.de/1962/47/das-verkaufte-talent>
- 8 1979年にはZDFがこの作品を原作としたドラマを制作し、同年のクリスマスの特番として放映している。Vgl. <http://www.wunschliste.de.0704>  
2002年にはKiKA (Kinder Kanal)が同作を原作としたアニメを放映した。

J.クリュス『ティム・ターラー』における現実と幻想的場面の効果

Vgl. :<http://www.wunschliste.de/6138/tv>

- 9 アダ・ビーバーは、Boy は「少年」という意味を持つ英語ではなく、クリュスの故郷ヘルゴラント島で話されていたフリース語が由来ではないかと推測している。彼女は、フリース語では「ブイ」《bui》と発音し、元々はケルト語の姓 Boier から派生した名前ではないかと指摘している。本論文では、固有名詞は森川訳に倣いボーイと表記する。Vgl.: Bieber, Ada: *Zyklisches Erzählen in James Krüss. Die Geschichten der 101 Tage*. Hamburg: Igel Verlag, 2012, S.12.
- ボーイはヘルゴラント島出身の作家で、旅を好み、物語を見聞し、収集する人物として登場する。これらのことからクリュスは、自身をモデルにボーイという登場人物を作りだしたと考えられる。
- 10 Vgl. : James Krüss: *Timm Thaler oder Das verkaufte Lachen*. Hamburg: Verlag Friedrich Oetinger 1962, S. 7.
- 11 「101日物語シリーズ」において、『ティム・ターラー』は36日目～42日目の物語を形成しており、全17作品中第7作品目に位置している。
- 12 日本国鉄道外務部 『欧米諸国の鉄道と交通制度』運輸調査局 昭和43年63ページ 参照。
- 13 同上参照
- 14 Vgl. : J.Crasemann u.a.: *HELGOLAND Rote Insel im Hochseeklima*. Lübeck: Schöning Verlag o.J.. Vgl. : Wiebke Kramp: *Helgoland. Reisereife für die Insel*. Hamburg: Koehlers 2011.
- 15 Vgl.: Ebenda.
- 16 Vgl. James Krüss: *In Tante Julies Haus. Mit Fantasie und Feder reich geschmückt von Jochen Bartsch*. Hamburg: Verlag Friedrich Oetinger 1969.
- 17 Krüss, James: *Der Leuchtturm auf den Hummerklippen*. Hamburg: Verlag Friedrich Oetinger 1956.
- 18 現在、ヘルゴラントとハンブルクを結ぶ船は Helgoline という船会社のみ出航している。
- 19 コラン・ド・プランシー(床鍋剛彦訳)『地獄の辞典』講談社 1990年30頁、フレッド・ゲティンクス(大瀧啓裕訳)『悪魔の事典』青土社 2008年 49頁参照。
- 20 リュフェットの他の性格も、悪魔の名前アスタロートの中に示されている。その一つが、「どんなに秘められたことに関する質問にも喜んで答えてくれるし、(…) 諸学問を徹底的に教授」する性格である。これらの性質はリュフェットにも見受けられ、リュフェットは本人の意思にかかわらず、ティムに企業経営を教える人物として描かれている。リュフェットは立派な経営者に育て上げるための様々な知識をティムに教授するのである。

漆 谷 球美子

- <sup>21</sup> 『地獄の辞典』(1990) 247～248頁および『悪魔の事典』(2008) 356～357頁を参照した。
- <sup>22</sup> 本作品において、ボーイとグランディッツィの「悪魔との契約」が成立することはない。しかしボーイは『ティム・ターラー』の続編の中でリュフェット等と再会し、対峙することとなる。
- <sup>23</sup> Klaus Doderer: *James Krüss Insulaner und Weltbürger*, a.a.O., S.129.
- <sup>24</sup> James Krüss: *Naivität und Kunstverstand. Gedanken zur Kinderliteratur*, a.a.O., S.108.
- <sup>25</sup> Klaus Doderer: *James Krüss Insulaner und Weltbürger*, a.a.O., S.133.